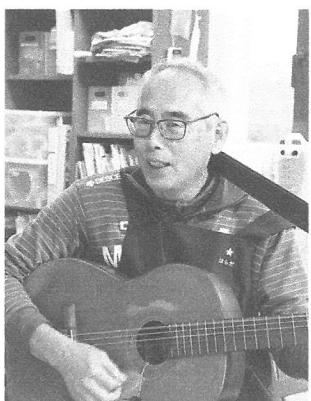


私に

人生と 言えるものが あるなら



原田文孝

はらだ ふみたか／1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤め、施設訪問学級に異動して7年間過ごし定年退職しました。退職後は、仲間と一緒に障害の重い人たちの生活介護と放課後等デイサービスの事業所を立ち上げ、現在運営と実践を続けています。私は教員生活のすべてを障害の重い人たちと過ごしました。施設訪問学級で初めて担任した佐藤さん（仮名）のことからお話しします。

く怒るのだろうかと考えました。佐藤さんは、右片麻痺でベッドでは左側を下にして側臥位で過ごしていることが多かったです。言葉の理解はむずかしいのですが、歌をうたつたり、絵本を読んだりするかかわりは好きでした。人見知りや場所見知りもありました。

佐藤さんが血が出るくらい激しく手を噛んで怒っているのは、他者にかかわることの不安な気持ち（心の痛み）を、からだの痛みで紛らわせようとしているのではないかと思いました。自分で自分を助けている姿なのです。では、なぜ、そんなに他者のかかわりが不安なのか、他者に対する不信感がつくられたのかを考えました。一つは、2歳から入所しているので、スキンシップの不足ではないかと考えました。スキンシップは、触ってくれる人への安心感や信頼感を培います。佐藤さんの不安は「触れてほしいけど、触れられたくない」と悩んでいます。佐藤さんの姿で「愛してほしい」という愛情要求があるのだと思うのです。私は佐藤さんのような人たちを「愛されたの人たち」と呼んでいます。二つ目は、今されていることの意味がわからなければ、今不安になるのではないかと考えま

した。多忙な職員さんは、佐藤さんと同じく忙しくとかかわっている時間があります。私もよくわからないことをされると不安になります。佐藤さんも今していること、されていることの意味を知りたいという能力要求があると思うのです。三つ目は、一人の人間として尊重したかわりをしてほしいという人権要求が満たされていないのではないかと考えました。

「ファーストな介護」と 「関係拘束」「理解拘束」

佐藤さんの人間不信や不安感がつくりつくりとつかわっている時間がありません。私もよくわからないことをされると不安になります。佐藤さんも今していること、されていることの意味づけや理解がむずかしくなっていると思うのです。私はこうした一方的な人間関係のための応答や要求が抑制されていることを一種の拘束と考え「関係拘束」と呼んでいます。また、「ファーストな介護」の中で、職員が佐藤さんのことを理解する機会も余裕もなく、不十分な理解とその理解に基づくかかわりによって、佐藤さんの活動意欲が抑制され、あきらめの気持ちにさせられていることも拘束と考え「理解拘束」と呼んでいます。「ファーストな介護」が求められることで、職員が「こんなはずじゃない」と辞めていたり、「しようがないなあ」「こんなもんかな」と思うことで優生思想が入り込みやすくなったりすると思うのです。

こうした生活の中で、佐藤さんには「もっとじっくり、ゆっくりとかかわってほしい、体験したい」「今していることをわかりたい」という生活要求があるのではないかと考えました。そして、佐藤さんへのとりくみの基本として「人への不信感・不安感に対しても、人への信頼を感じてもらえるようなかかわり・実践

第1回 人生どうにかなるさ 生活指導実践と佐藤さんのねがい

佐藤さんは42歳で、2歳の時から入所していました。佐藤さんに初めて出会った時の強烈な姿は今でもはっきりと覚えています。職員さんが、佐藤さんのおむつ交換や着替えの仕方を私に教えるためにかかわろうとするとき、佐藤さんが大声を激しく叫いたり、その手を噛んだりして暴れ始めました。あんまり激しく噛むので、手から血が出るほどでした。職員さんは、佐藤さんに帆布を渡しました。佐藤さんがその帆布を激しく噛み始めたので、その間におむつ交換や着替えをしました。

私は、佐藤さんは、なぜこんなに激しくしていました。佐藤さんに初めて出会った時の強烈な姿は今でもはっきりと覚えています。職員さんが、佐藤さんのおむつ交換や着替えの仕方を私に教えるためにかかわろうとするとき、佐藤さんが大声を激しく叫いたり、その手を噛んだりして暴れ始めました。あんまり激しく噛むので、手から血が出るほどでした。職員さんは、佐藤さんに帆布を渡しました。佐藤さんがその帆布を激しく噛み始めたので、その間におむつ交換や着替えをしました。

愛されたの佐藤さん